第６課　管理者の印

【暗唱聖句】

「こういうわけですから、人はわたしたちをキリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者と考えるべきです。この場合、管理者に要求されるのは忠実であることです」第一コリント4:1、2

【今週のテーマ】

クリスチャン管理者としての印とは何かについて学びます。

【日曜日・忠実さ】

「管理者に要求されるのは忠実であることです」第一コリント4:2

管理者の印の一つ目は「忠実」です。忠実とは神様の個性でもありす。聖霊はわたしたちの内に働くとき私たちは忠実な神の働き手となることができます。この忠実とは、とりわけ霊の闘いにおいて、神様の正しい教えに忠実であり続けることを意味しています。善と悪との闘いは必ずやってきます。そのような状況において良き管理者は、神様の教えに忠実であろうとします。その選択は一瞬ですが、その結果は永遠に及ぶ可能性があります。

「信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです」ヘブライ11:8

神様に忠実に生きるためには、信仰が必要になることがあります。その信仰は神様の素晴らしい約束を信じる信仰です。アブラハムは出ていく先が自分の財産として受け継ぐことを信じて旅立ったのです。私たちが神様のみ言葉に忠実であろうとするとき、どのような約束のみ言葉を信じているでしょうか。神様の約束を信じることが、忠実に生きるための大きな力となることを覚えましょう。

【月曜日・忠誠心】

「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」マタイ6:24

管理者の2つ目の印は神様への忠誠心です。神様への忠誠心を考えたとき、このマタイ6:24のみ言葉ほどストレートな教えはないでしょう。私たちは二人の主人に仕えることはできません。この場合2人の主人とは、「神」と「富」ということですが、「富」という言葉の代わりに何を持ってきたとしても同じことです。わたしたちの忠誠心は神様に対してのみです。他の何物であったとしても、神様以上のものがあってはならないのです。一見、私たちは神様と他の何かを同時に、使い分けて愛することができるように思うかもしれませんが、しかし、常に「一方を憎んで他方を愛するか、あるいは一方に親しんで他方を軽んじるか」という結果になることをイエス様はご存知でした。つまり、これは神様以外のほうを愛し、神様を軽んじる結果になるということです。ちなみに聖書の教えは、神様を愛し、神様に忠実であるとき、富は必要なときに必要な分、祝福として与えられるから、心配するなということです。

「わが子ソロモンよ、この父の神を認め、全き心と喜びの魂をもってその神に仕えよ。主はすべての心を探り、すべての考えの奥底まで見抜かれるからである。もし主を求めるなら、主はあなたに御自分を現してくださる。もし主を捨てるならば、主はあなたをとこしえに拒み続けられる」歴代誌上28:9

神様はわたしたちの心の奥底まで見抜かれます。私たちが神様に忠誠心を示す動機は何でしょうか。この世の権力者に対するような恐怖心からでしょうか。それも会社の上司に行うような義務からでしょうか。神様は全き心と喜びの魂をもって忠誠心を示すことを望んでおられます。そこには互いの愛があります。もしわたしたちが心から主を求めるなら、主はわたしたちに御自分を現してくださいます。これは大きな喜びです。わたしたちが神様に忠実であればあるほど神様との関係はより一層深まります。

【火曜日・やましさのない良心】

「こういうわけで私は、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を絶えず保つように努めています」使徒24:16

管理者としての3つ目の印は、責められることのない良心です。神様に忠実に生きる者として、神様だけでなく、人からも責められることがない良心を保つことは大切なことです。良心は外面的な生き方の内面的な監視役として機能しており、神様の教えと結びつくことでより一層、神様に忠実なものへと導かれていきます。しかし逆に良心が麻痺してしまうと、正しいことの判断ができなくなり、神様に忠実に生きることも難しくなってしまいます。実際に、「終わりの時には、惑わす霊と、悪霊どもの教えとに心を奪われ、信仰から脱落する者がいる」と聖書は警告していますが、後に次のような言葉が続きます。

「しかし、“霊”は次のように明確に告げておられます。終わりの時には、惑わす霊と、悪霊どもの教えとに心を奪われ、信仰から脱落する者がいます。このことは、偽りを語る者たちの偽善によって引き起こされるのです。彼らは自分の良心に焼き印を押されており」第一テモテ4:1，2

「自分の良心に焼き印を押されており」と書かれてあります。一見何のことを言っているのかわかりにくい表現です。これは「良心は焼け焦げた肉と同様に死んでいる」という意味、つまり良心が死んでしまっているということです。新改訳聖書では「良心が麻痺しており」と訳されています。良心が死んでしまえば、惑わす悪霊に心が奪われ、信仰から脱落してしまうことでしょう。では、どうしたら正しい良心を保つことができるのでしょうか。

「わたしたちには神の家を支配する偉大な祭司がおられるのですから、心は清められて、良心のとがめはなくなり、体は清い水で洗われています。信頼しきって、真心から神に近づこうではありませんか」ヘブライ10:21，22

「まして、永遠の“霊”によって、御自身をきずのないものとして神に献げられたキリストの血は、わたしたちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか」ヘブライ9:14

キリストの血によって、わたしたちの良心が死んだような状態であっても、もう一度清めてもらうことができます。心が清められると、良心のとがめはなくなり本当に解放された喜びを味わい知ることでしょう。

【水曜日：服従】

管理者としての4つ目の印は服従です。カインとアベルの物語は、正しい神様への服従とはどういうことなのか、また不服従の結果何が起こるのかを教えています。神様への捧げものとして祭壇に持ってくるように言われていたのは、キリストを象徴する子羊の初子でなければなりませんでした。そのことはカインも知っていました。アベルはカインが子羊ではなく地の産物を捧げようとしているのを見て、それは神様が要求しているものではないと言いますが、カインはその言葉に耳を傾けず、自分がしたいようにしたのでした。その結果、当然のことながらカインの捧げものを神様は顧みることはありませんでした。

神様の教えを自分の都合よく解釈したくなる誘惑があります。しかし、それは正しいことではありません。神様の教えに対して、「はい」か「いいえ」しかないのです。もし、神様の要求通りできないときは、代わりのもので代用するのではなく、素直に弱い私を許してくださいと謝るしかないのです。

ところで、なぜ私たちは神様に服従するのでしょうか。それは救われるためではなく、すでに救われているからです。救われた喜びと神様に対する愛の表れが、み言葉への服従なのです。

「このことから明らかなように、わたしたちが神を愛し、その掟を守るときはいつも、神の子供たちを愛します。神を愛するとは、神の掟を守ることです。神の掟は難しいものではありません」第一ヨハネ5:2、3

【木曜日・信頼できる】

管理者に必要な5つ目の印は信頼されることです。信頼できない人に大切なものを任せることはできません。神様が100％信頼できるお方であるように、神様を信じる管理者も100％信頼にたる人物でありたいと努めます。この信頼を得る人というのは、一連の成熟した品性が伴ない、人が達しうる最も高い水準の品性や能力を有していると言えます。

　聖書のヨセフやダニエルは王から高い信頼を得ていましたが、彼らは恐れることなく、神様からの知恵と真理を語りました。それができたのは信頼されていたからです。しかし、この信頼は一晩で得たものではありません。長い時間をかけて、小さなことにさえ忠実であるその生き方を通して勝ち得たものでした。

「く小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である」ルカ:10